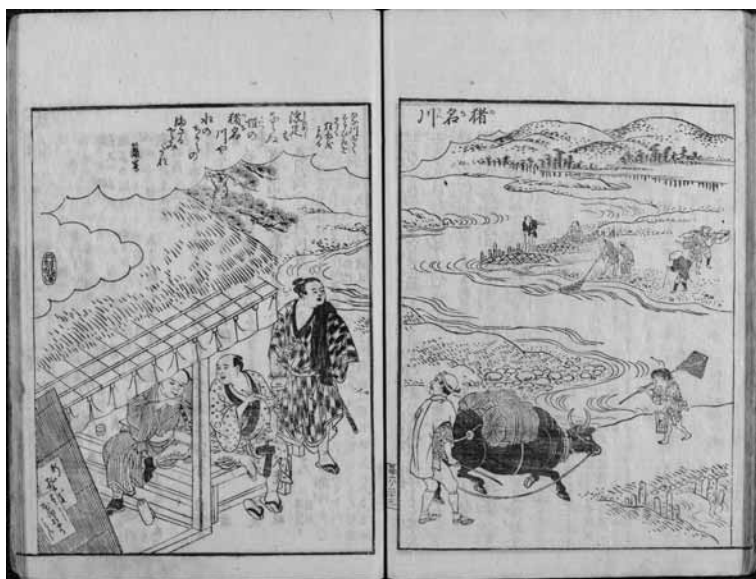


あき さと り と う      せ っ つ め い し ょ ず え  
**秋里籬島 『撰津名所図会』**  
 — 稿本・版本から分かる絵師交代の内側 —



撰津名所図会（稿本）



撰津名所図会（版本）

秋里籬島は、〈名所図会〉と呼ばれる絵入り地誌シリーズの作者（编者）として知られた京都の著述家です。籬島とコンビを組んだのは大坂の絵師竹原春朝齋で、二人はよく一緒に取材旅行をしていたようです。しかし、〈名所図会〉を順番に見ていくと、第五作目の『撰津名所図会』は、それ以前と少し様子が違うことに気づきます。本書全十二冊は、「撰津（国）」のうち、現在の兵庫県側にあたる四冊（巻之七―九）が先に刊行（寛政八―一七九六）年九月）され、大阪府側にあたる八冊（巻之一―六）が、二年遅れて刊行（寛政十年九月）されているのです。

このように変則的な出版になった理由は、本書制作の途中で春朝齋に故障があったため（以後新たに挿絵を描かず、寛政十二年没）と考えられ、事実、寛政八年刊の四冊分の初印本（最初の刷り）では、春朝齋に加え、何人かの絵師が挿絵を描き足しています。ところが、同じ四冊分の後印本（後の刷り。初印の直後か）

では、春朝齋以外の絵が、初印本にも参加していた大坂の絵師丹羽桃溪（当時三十五歳）一人の絵に差し替えられ、寛政十年刊の八冊分は、最初から春朝齋（風景画など少し）・桃溪（浪華の風俗を中心とする大部分）の絵になっています。春朝齋のリタイアは、桃溪の台頭を生んだわけですね。

当館では『撰津名所図会』の籬島自筆稿本二冊を所蔵していますので、版本（刊行された本）では巻之六上（三三丁裏・二四丁表）にあたる「猪名川」の絵を、稿本の絵と比べてみます（図）。

稿本から、もとは春朝齋の画作と分かりますが、版本では、茶店の客や相撲取りなど前景の構図は同じで、遠近の変更と細部の描写が施されただけに、画面左端中央に「丹羽桃溪」の印が見えます。ほとんど丸取りでの名義変更は驚きですが、当時は慣習化されていたのでしょうか。ともあれ版本と稿本の比較から絵師交代の内側がうかがえる、興味深い資料です。

（大高洋司）